



憧憬の街、ウィーン

神戸大学 経済経営研究所

准教授 岩佐 和道

2017年4月から在外研究のため、2年間ウィーンで過ごした。音楽は私にとってかけがえのないものであるということもなく、ウィーンに対しては特段何の思い出も持っていなかったが、さすがに英誌エコノミストの調査部門が発表した「2018年世界で最も住みやすい都市ランキング」の一位に輝いただけあって、とても暮らしやすい良い街であった。

ウィーンで暮らし始めると、人々が子供や子連れの親に対して、とても親切であることに驚いた。日本では邪魔者扱いのベビーカーも、当地では日本の一回りも二回りも大きなベビーカーでも、何の問題もなくどこにでも行け、荷物をたくさん積むことができ、スーパーではショッピングカート代わりになり、子供が眠たくなればそのまま眠れる夢のような乗り物となっている。そのようなベビーカーでの自由な移動は、全ての場所がバリアフリーであるとか、いつも車内が空いているからといった物理的な理由から可能となっているわけではない。育児の大変さやその重要性から、人々が親子連れを優先的に扱うことを当然のこととして認め、また惜しみなくその手助けを行うからである。(ただし、公共交通機関が発達し、どこにでもトラムやバスで行けることが、前提であることは確かである。)例えば、トラムやバス、あるいは電車にベビーカーで乗り込むと、そのためのスペースが瞬時に空き、古いタイプのトラムにある急な段差では、その場に居る人がすぐにベビーカーを持ち上げるのを手伝う。ぐずる子供には、周りの乗客がにこやかに笑ってその相手をする。もしかすると、この人達は神様が見ていると信じて、自らの善行ポイントを貯めようとしているのではないかと勘繰りたくなるほどの親切さである。

ウィーンの人々が、それほど優しく親子連れに接することができる理由の一つは、余裕をもって生活を楽しみ暮らしているからではないかと思う。

ウィーンでは、土曜日は18時にはスーパーやショッピングセンターが閉まる。日曜日は飲食店を除くほとんど全ての店が閉まってしまう。ウィーン渡航後に知らずにIKEAに行ったときには、巨大なIKEAが日曜日に完全に閉まっていることにとても驚いた。(ちなみに私が借りたアパートを扱っていた不動産屋は土日が休みであった。)それで人々がどう

やって暮らすのかと思うかもしれないが、どうやらウィーンの人々は、金曜日は早々に仕事を切り上げて帰宅し、何か用事があるときには何の抵抗もなく仕事を休んでいるようだ。その証拠に、金曜日の 15 時過ぎには、公園に幼稚園の子供を迎えに来た親子（父親も）があふれかえり、平日に行われた幼稚園の説明会にも、当然のように両親が参加している。これだけ日々の暮らしに余裕があれば、日本でも親子連れを取り巻く状況はかなり変わるのではないだろうか。

このような労働者が享受する余裕のある暮らしの裏返しとして、ウィーンで受けることができるサービスは、非常に悪い。

ある日、リビングにある大きな窓の金具が壊れてしまい、窓が閉まらなくなった。非常に困るのですぐに管理会社に連絡し、翌日には修理のおじさんが来たものの、おじさんはしばらく作業に取り掛かったのち、道具が足りないのでまた明日と言いつつ帰ってしまった。翌日に修理は完了したものの、その窓は古いためか、翌年にまた壊れてしまった。今度は窓枠からずれてしまい閉めることができない。畳一畳分もある大きな重たい窓なので、管理会社に連絡する際には、窓と破損個所の写真に加えて、一人では作業が行えない旨を伝えた。管理会社からは、あいにく、修理のおじさんはバカンスに出かけているため、翌週にならないと作業は行えないと伝えられた。天気が大崩れせずに壊れた大きな窓のまま何とか過ごすことができた 1 週間後、とうとう修理のおじさんが来た。なぜか一人で来た彼は、土足でリビングに入って窓を見るなり、一人ではできないのでまた明日と言いつつ帰っていった。

ここまでは、悠々自適に働く修理のおじさんの話であった。他にもいろいろとあったが、紙幅と記憶の関係で紹介はやめておく。

翻って、日本では労働者を酷使することで、過大なサービスを享受しているように感じる。最近では、私の高校時代の友人を含めて、株式投資などによる所得を得ている者も多くいるようである。株を保有していると、私などは何となく資本家のような気分になる。しかし労働者を安価に使うことで、自分の暮らし向きが良くなるのは、自分の総所得に占める賃金所得の割合が、労働分配率以下となるような限られた方々だけのよう気がする。そうすると、私はやはりプロレタリアートであり、ウィーンの労働者の暮らし向きが日本にも伝搬し広まることを祈念することは、あながち間違いではないと思う。